



2015年/北東アジア平和と友好の旅

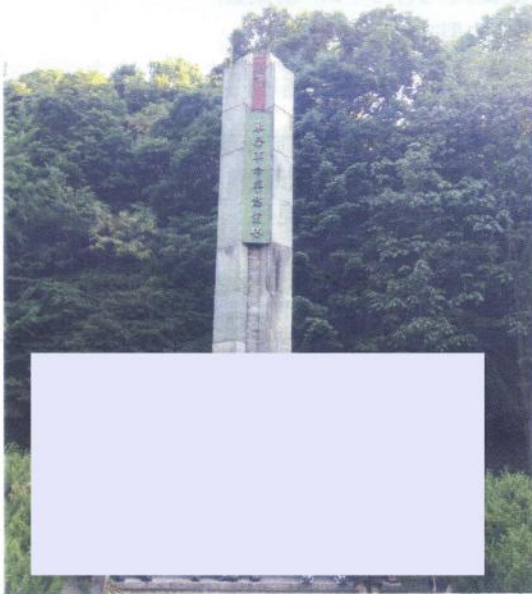
平和な北東アジアを築くために日清・日露戦争の真実を学ぶ

朝鮮半島から山東・遼東半島へ

～韓国/全州、井邑・中国/青島、威海、大連、旅順～

旅行期間 5月26日(火)～31日(日) 6日間

旅行感想文集



5/26 韓国/牛禁峙



5/29 中国/劉公島

企画・実施

日本中国友好協会大阪府連合会

日本コリア協会・大阪

大阪私学退職者の会

協力

JU 観光旅行友の会

中国にはこれまで何度か訪れていますが、韓国は一度は行ってみたいと思っている間にこの歳になってしまい、今回意を決して参加し初めて韓国の地を踏みました。中国の大連や青島は再訪の地でしたが20～30年前のことで、この間の変貌は著しいものがありました。その他の地は初めてのところで、それぞれに印象に残るところでした。ここではそのうちのいくつかについて書いてみます。

1. 東学農民革命の故地

全州は日清戦争に関連して必ず出てくる地名ですが、通常の観光コースには入っていないので、何度も韓国を訪れている知人も行ったことがないと言っていました。今回その歴史の現場を訪れることができ幸いでした。牛禁時の東学農民戦争激戦地や井邑の東学農民慰霊塔の行ったときは、うららかな日和でかつてこの地で多数の東学農民軍兵士の血が流されたことが信じられない程でした。しかし紛れもなくこの地には日本軍の武器によって流されたおびただしい量の血がしみ込んでいたことを想起し、厳粛な気持ちでその場にたたずんでいました。

2. 煙台から大連へ

煙台から大連の航海はあいにくの雨でした。日清戦争や日露戦争の海戦の舞台となったこの海や周辺の陸地や島影を見ることはできませんでした。夕陽の沈む光景を期待していた人もおられたようです。ここを渡っているときは思い当たりませんでした。後で振り返ってみるとこの航路は19世紀後半～20世紀初頭に山東から東北への多くの移民が渡った航路だったのです。煙台の港は当時芝罘と呼ばれていました。出稼ぎ農民としてその後山東に戻った人々もいたのですが、そのまま東北の地に住み着いた農民もいます。そのため東北には祖先が山東という人が多いようです。

3. 水師營跡の建物について

二〇三高地は日露戦争の帰趨を決した戦場として知られるところで、そこから旅順港を一望できることを確認できました。難攻不落といわれたロシアの要塞を占領するために突撃を繰り返し、おびただしい数の兵士の命が失われた山で、当時は草木も生えていませんでした。今はすっかり緑の木に掩われて当時をしのぶよすがもないのですが、徴兵でかり出されてここで命を落とした日本軍兵士、その標的となったロシア軍の兵士の運命を心に刻みました。

乃木希典とロシア側代表ステッセルの会見の場所として有名な水師營の建物は日本人観光客以外にはあまり関心を持たれていないようです。ここは文革時に破壊され、その後修復されたという現地の担当者の説明がありました。同行者の1人が水師營の建物は京都の乃木神社にそのまま移築されたはずだと指摘されました。帰国後気になっていましたが、たまたま京都に行く用事あったので京都の乃木神社を訪れてみました。東京の乃木神社は行ったことがあったのですが、京都に

もあったことを初めて知りました。乃木神社にある記念館の説明には「この記念館はもと中国東北
区柳樹房にあった周玉徳・周金ご夫妻の住宅で日露戦争の際第三軍司令部として使用されてい
たものである」と書いてありました。乃木は第三軍司令官でした。平屋建ての外観はたしかに水師
営跡とよく似ているので間違いやすいのでしょう。

4. 万忠墓

日清戦争時に旅順に攻め込んだ日本軍によって虐殺事件が引き起こされたことは歴史事実とし
て知られるようになりましたが、今回その犠牲者の慰霊の施設を訪れることができました。その万忠
墓のガイドが1948年に万忠墓の改修が行われ、その設計者が「矢口浩」という日本人であったと説
明したのが気になりました。

大連・旅順は1951年に中国に返還されるまでソ連の支配下にありましたが、軍政ではなくて中国
人の市政府を置いて間接統治をしていました。井上晴樹『旅順虐殺事件』(1995年、筑摩書房)に
よれば、清国期に造られた万忠墓は日本の支配時期には荒れ果てていたが、1948年市政府の決
定により改修された。「今度の墓は、日本のそれに似ていた。それもそのはずで、墓の設計者は紛
れもなく日本人であったのである。それは、矢口浩という人物でこの当時まだ旅順で働いていた日
本人であったのである」(265頁、因みに本書は中国でも翻訳・出版された)。1948年といえば日本
人の引き揚げはほぼ終わっていた時なので、建築設計の技術者として留用されていたと推定され
ますが、今のところこれ以上のことはわかりません。

5. 旧ヤマトホテルの溥儀宿泊

溥儀という人物にそれほどの関心を持っていなかったし、まして宿泊したホテルの部屋がどれか
についてはあまり意味があるとも思っていませんでしたが、同行者の1人が「ここは溥儀の泊まった
部屋ではない」と疑義を挟まれました。そういわれると、歴史的事実としてどうだったかと気になっ
てきました。ホテルのガイドに溥儀が泊まった日付とそれを示す根拠について尋ねればよかったと
思いましたが、後の祭りでした。

溥儀は執政就任の前に土肥原賢二らの陰謀によって天津から東北に連れ出されて来たときは、
旅順のヤマトホテルに泊まっているので、その時ではないでしょう。あと大連に来たと考えられるの
は1935年と1940年の訪日の際、大連を通過しているはずです。溥儀の回想『我的前半生』では訪
日については書かれていますが、旅程の詳細についてはふれていません。1935年の訪日について
は通訳として随行した林出賢次郎の『扈從訪日恭紀』(1936年、満洲国国務院総務庁情報処)に
詳しい記録がありますが、それによれば、往復とも大連駅と大連港の間を直行しており宿泊はして
いません。溥儀がとりわけ外国人に脚光を浴びるようになるのは1987年にベルトリッチ監督の映画
「ラストエンペラー」が制作されて以降です。このホテルが溥儀の宿泊を一つの目玉として宣伝す
るようになったのもその後と推測されます。おそらくそれまでは一般の客室として使用されていたの
でしょう。あるいは別の用途に供されていたのかもしれませんが。置いてあった電話機は現在は業務
連絡用に使用されているのでしょう。満洲国時代に現在のように各客室に電話機が備わっていたか
どうかもわかりません。溥儀の居住の場所でもなく、泊まったとしてもせいぜい一泊、調度品や什器
までそのまま保存されていることはまずないでしょう。溥儀の宿泊の真偽については、大連賓館で

宿泊の日付と部屋についてその根拠となる資料を聞いた上で再考するのがいいと思います。再度行く機会のある方、あるいは知人があれば聞いていただけたらと思います。